

15	豊川	豊川市立一宮中学校	ヤマモト アヤノ	
			名前	山本 綾乃

分科会番号	2	分科会名	外国語教育
-------	---	------	-------

研究主題

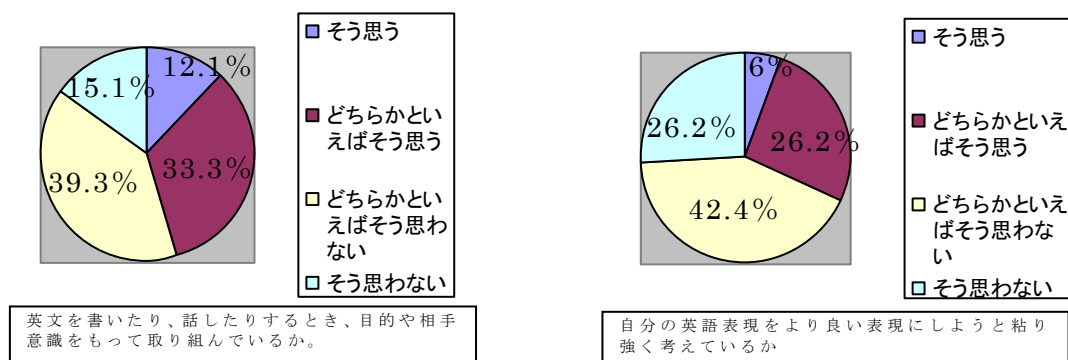
目的や相手意識をもって、表現豊かに自分の考えを伝えようとする生徒の育成
～「1年生 Unit7 日本のオンラインツアーを考えよう」の実践を通して～

研究要項

1 主題設定の理由

本学級の生徒は、ペア活動やグループ活動など、仲間とかかわり合いながら積極的に言語活動を行うことができる。また、これまでの学習で「自分の推しを紹介しよう」など与えられたテーマについて、学んだ表現を用いて英作文をしたり、友達に伝えたりすることができた。しかしその一方で、一度書いたり伝えたりしたことですぐに満足してしまい、より良い表現を粘り強く考える姿勢が見られなかったり、目的や相手意識をもたずに、ただ思いついた英文を羅列するだけで終わってしまったりする生徒も多い傾向がある。

【資料1】1学期末の英語学習に関するアンケート



1学期末には英語学習に関するアンケートを行った。資料1の結果から「英文を書いたり、話したりするとき、目的や相手意識をもって取り組んでいるか」という問いに対して、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答える生徒が54.4%と半数以上いることが改めてわかった。また「自分の表現をより良い表現にしようと粘り強く考えているか」の問いに対しても、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」という生徒が68.6%と非常に多かった。実際の授業の様子を見ると、与えられた課題に対しては多くの生徒が一生懸命取り組んでいるものの、目的に沿ってより豊かな表現で伝えようと努力することに対しては非常に消極的であることがわかる。

以上をふまえて、学習に際して目的や相手意識をこれまで以上にもたせるために課題設定をしっかりと行い、自分の考えや学びを仲間と共有して参考にし合う場面設定を多く取り入れ、より良い表現を学ばせる時間を増やすことが必要だと考えた。そして、相手に伝えるためにはどんな表現が適切かを単元を通して考えさせ、「目的や相手

意識をもって、表現豊かに自分の考えを伝える生徒」に成長してほしいと考え、本主題を設定した。

2 研究の方法

(1) めざす生徒像

- ・目的や相手意識をもって、自分の考えを伝えようとする生徒
- ・より良い表現を模索し、表現豊かに自分の考えを伝えようとする生徒

(2) 研究の仮説

- 【仮説Ⅰ】単元をつらぬく課題を設定し、相手を意識して英語表現を考えたり、コミュニケーションをとる場面を繰り返し設定したりすれば、目的や相手意識をもって自分の考えを伝えようとすることができるであろう。
- 【仮説Ⅱ】生徒個人の学びや考えを共有し合い、仲間のさまざまな表現を知る場を設定すれば、より良い表現を模索し、具体的な情報を付け加えたり、より正確な表現を用いたりして、表現豊かに自分の考えを伝えることができるであろう。

(3) 仮説に迫るまで

【手だてⅠ—ⅰ】英語の必要感をもたせた単元を貫く課題設定

単元の初めにフィリピンのオンラインツアーを AET に実施してもらい、母国をどのように英語で表現すれば魅力が伝わるかを生徒に理解させる。そのうえで、AET から日本について英語で表現することを求めてもらい、「AET へ日本の観光地を紹介するオンラインツアーを実施すること」を本単元の課題として提示する。AET からのリクエストを課題に設定することで英語の必要感を高め、各パートでどんな表現を学ぶことが単元末の課題を達成することにつながるのかを考えさせたい。毎時間、課題に向かって授業に取り組み、成長する姿を期待する。

【手だてⅠ—ⅱ】相手意識をもって自分の考えを伝える Small Talk

帯活動として毎授業 Small Talk の時間を設定することで、自分の気持ちや考えを伝える機会を繰り返し設け、英語で自己表現する力の育成を図る。また、会話を続けたら、広げたりするためのあいづち表現を生徒に事前に示す。あいづち表現を意識的に用いるように指導することで、相手の反応を見て言葉を選ぶ姿勢を育て、相手を意識したコミュニケーション能力の向上を目指す。

【手だてⅡ—ⅰ】ICT を活用してリアルタイムに学びを共有する場の設定

各パートの授業で新しい文法を学んでいく際に、英作文の練習として学びポケットのチャンネル機能を用いて、与えられたテーマに対する英文を各自に投稿させ、その内容を互いに閲覧できるようにする。また、単元の終盤では、ICT 支援ツール「SKYMENU」の発表ノート上で英文を作成させ、ライブ提出箱に提出させることで、それぞれが考えたオンラインツアーの英文をその場で互いに閲覧できるようにする。これらの活用により、多様な表現や考え方をリアルタイムで共有させることで、自分にはない表現を参考にして具体的な情報を付け加える一助としたり、より適切な表現を学んだりする姿を期待する。

【手だてⅡ—ⅱ】ペア・グループ活動の充実

各パートの授業で、ペア活動やグループ活動を要所で取り入れる。与えられたテーマに対して各自で英文を考え、ペアで伝え合ったり、授業の振り返りで学んだことを共有したりする活動を行わせる。また、単元末のオンラインツアー発表に向けては、個人で原稿を考える前段階としてグループで発表原稿を作成させ、仲間と意見を出し合いながらより適切で伝わりやすい表現を模索させる。これらの活動を通して、表現の幅を広げる姿を期待する。

3 研究の実際

(1) 単元構想図 (資料 2)

(2) 研究の実践と考察

① 【手だて I — i】英語の必要感をもたせた単元を貫く課題設定

単元の導入では、AET からのビデオメッセージを見せた。メッセージでは、AET がフィリピンの写真を用いながら母国を紹介するオンラインツアーを行った。ビデオメッセージの中身は、“Many people are walking on this street.”, “Many people are visiting Manila Cathedral. They are praying here.” など現在進行形の文章を意図的に用いた。オンラインツアーを行う上で、現在の情景を描写する現在進行形の用法は必要不可欠である。また、“I’m interested in sightseeing places in Tokyo, Okinawa, Hokkaido and Osaka, Japan. I want to join some online tours about Japan.” と AET に話してもらい、日本の観光地を紹介するオンラインツアーを生徒たちへ依頼した。

生徒は最初、興味深そうにフィリピンの写真を眺めた。写真のおかげで、生徒たちは新出文法である現在進行形の英文やメッセージに込められた AET の内容についておよそ理解できているようであった。ビデオを流した後、「どんな内容であったか」を問いかけたところ、「東京とか北海道とか、日本の観光地に興味があるからオンラインツアーをやってほしいって言っていた」と答えた。この AET のビデオメッセージを参考に、単元の最後に日本のオンラインツアーを考えることを単元のゴールとして設定した。また、単元最初の授業でゴールを確認しただけではなく、毎時間の授業において、その時間に学習した内容を用いながら、オンラインツアーの原稿につながる英文を考える場を設定した。生徒は、AET にオンラインツアーで紹介するという目的を意識しながら、その場所の様子を伝えるためには現在進行形が必要であることに気づいている様子が見られた。具体的な目的があることで、毎時間習得すべき英語表現が何なのか、生徒自身が理解しやすくなり、授業内の活動にも意欲的に取り組むことができた。

② 【手だて I — ii】相手意識をもって自分の考えを伝える Small Talk

Small Talk は帯活動として春から継続的に授業開始の 5 分間で実施してきた活動である。1 分から 1 分 30 秒程度で毎回ペアを変え、複数の仲間と会話練習をする

学習の流れ	支援・手だて
オンラインツアーのイメージを共有する① ＜オンラインツアーがどのようなものかを知る＞ (AET のモデルスピーチ) H, everyone. Now I'm interested in sightseeing places in Tokyo, Okinawa, Hokkaido and Osaka, Japan. I want to join some online tours about Japan. So showing something, please. Instead of Japan, I'm going to do an online tour about the Philippines. "Welcome to our online tour. I'm at a market in Manila, Philippines. Many people are walking on this street. You can buy food and souvenirs here. Next, many people are visiting Manila Cathedral. They are praying here. You can see a big pipe organ and stained glass." Thank you for watching. Bye. ＜「今～している」という表現を知る＞ ・「～している」と言いたいときは be 動詞＋ing といえよ。んだね。 ・この形を現在進行形っていうんだね。	・単語を通して授業の趣向性としてモデルスピーチを行い、自分の考えや気持ちを伝える力や、話をつなげる力を高める。 ・生徒はタブレットで撮影した AET からのメッセージ動画を再生し、AET に日本の観光地について伝えるという目的意識をもたせる。 ・AET の動画を通してモデル文に触れることで、単元の終わりにどのような表現を身につけることで目的を達成できるのかイメージをもたせる。 ・写真を見せて、その様子を I 文で表現する場面をさせることで、現在進行形を用いて一場面をわかりやすく伝える力を身につける。 ・自分の意見だけでなく、ペアの意見の表現を尊重させ、全体で共有することで表現の幅を広げる。(②～⑤)
オンラインツアーの表現方法を学ぶ② ＜「～しています」といえる表現を知る＞ ・be 動詞が主語の前にくるとなる表現になるね。 ＜どのような表現方法がオンラインツアーに適切なかを学ぶ＞ ・今見えている様子をレポートするだけでなく、どんなことがそこできているか、目に見えない情報も知るとわかりやすいね。	・教科書で扱われているロンドンのオンラインツアーを参考に、どのような情報も、どのような表現で伝えることがオンラインツアーに必要なかを考えさせる。 ・紹介する地域ごとに座でそれぞれの英文を紹介し合う場を設定したり、skymemo 上で英文を作成し、仲間の作品を参照できる機能を作ったりすることで、より豊かな表現を伝えるようにさせる。
日本の観光地のオンラインツアーを考えよう③④ ・どんな表現を使うか、写真のイメージがしっかり伝わるかな。 ・この写真に対しては、どんな風に表現すると「～している」といえるかな。	・英語のオンラインツアーの実況レポートを聞いて、自分の内容と比較させ、より適切な表現や必要な情報はないか考えさせる。 ・AET からフィードバックを受けたり、発表の様子を動画で自身で見返したりすることで、より何より正しい英語で話すにはどんなことを意識したらよいかを考えさせる。
オンラインツアーの実況レポートを練習しよう⑤ ・英語のオンラインツアーの中に出てきた表現は、自分でも使えそうだな。 ・もう少しインテンションに気をつけて話せると伝わりやすいかな。	
オンラインツアーを公開しよう⑥ (ペア⑥) Welcome to our online tour. Now I'm in Asakusa, Tokyo. Many people are visiting Kaminarimon. Some of them are eating delicious food. You can buy Japanese traditional sweets and souvenirs here. ・AET の名所や特徴へ英語で伝えることができた。	

資料 2 単元構想図

機会を設ける。本単元でも同様に行い、相手の応答をもとに会話を続けながら、英語で自己表現をする練習を繰り返すことで、相手に応じて言葉を選ぶ姿勢を育てたいと考えて実施をした。生徒は Small Talk 用のカードを用いて会話練習を行った。カードには資料 3 のあいづち表現を載せておき、意識的に使うように繰り返し指導した。資料 4 は本単元の第 4 時に行った授業における、生徒 A と生徒 B の Small Talk の対話記録の一部である。一問一答で 1 つの話題を終わらせず、下線部のように相手の発言をあいづち表現を使って受け止め、話題を広げたり、会話を続けたりすることができている。生徒 A、B の生徒以外の生徒たちも、多少ぎこちなくなってしまうたり、返事につまったりする場面はあるものの、あいづち表現を積極的に使う姿が見られた。週に 1 回程度、Small Talk の後に「言いたかったけど言えなかった表現」や「言えるとよかった表現」をペアやクラス全体で振り返り、共有する場も設けた。資料 4 の第 4 時の Small Talk の後の振り返りで、生徒 A は「お互い弟がいると分かったから、弟についてもう少し詳しく聞けばよかった。Does he とか三単現で聞けたのに」と話していた。相手の話をよく聞き、内容に応じて自分が次に話す内容を考えようとする姿があったと考える。

③ 【手だてⅡ－i】ICT を活用してリアルタイムに学びを共有する場の設定

本単元の第 2 時～第 5 時では、学びポケットのチャンネル機能を用いて英作文する活動を行った。クラスのチャンネルに資料 5 のようなお題となるイラストを送り、このイラストを描写するような英文を複数考えてチャンネルに投稿するように指示した。生徒 A は最初にいくつかの英文を投稿した。さらに“Ken is studying.”という英文を投稿した後、仲間の英文を一通り見て、“Ken is studying English.”と教科名を付け足した。資料 6 は生徒 A が仲間の英文を見ている様子である。その後も、別のイラストのお題を見て数文打ち込んだ後、仲間の投稿を見て再び“Aki is running.”と付け足した。また、“Miho is takeing a picture.”と投稿した自分の文章のスペルミスに気づき、“Miho is taking a picture.”と編集して直す様子も見られた。仲間の英文を見ることで、より具体的に AET ヘツアーの魅力を伝えるために情報を付

Really? / For real?
Are you serious? / And then?
How about you? / How about ~?
Why? / Why do you think so?
I see. / I know. / I think so, too.
I feel you. Same here.
Good! Nice! Great! Cool!
Sounds good. / Sounds nice.
That's great! / Exactly.
That's true.

資料 3 Small Talk で示したあいづち表現

A: Do you have any brothers or sisters?
B: Yes, I do. I have a brother.
How about you?
A: I have a brother, too.
B: How old is he?
A: He is 10 years old.
B: I see.
A: What subject do you like?
B: I like English.
A: How about math?
B: I don't like math.

資料 4

生徒 A、B の Small Talk の対話記録の一部



資料 5 まなびポケットのチャンネル機能に投稿した英作文のお題

け加えることができたと考えられる。また、より正確に AET へ内容を伝えるために、ミスに気づいて訂正したりする様子も見られた。リアルタイムに共有することで、ミスに対する気づきが紙面に書くときよりも早く、英語が苦手な生徒も手を止めることなく、仲間の表現を見て真似して見ることができるなど多くの利点があった。自分が投稿した文と異なる英文だけでなく、逆に同じような表現を仲間の投稿から見つけることで、自分が考えた内容が正しいのだという自信にもつながっていたと思われる。そうした安心感からどの生徒も前向きに活動に取り組む姿が見られた。

また、第 6 時は SKYMENU の発表ノートで原稿づくりをグループごとに行った。原則 4 人のグループで、紹介したい日本の観光地を決めて原稿を作成した。発表ノートはライブ提出箱に提出させることで、リアルタイムに他グループの原稿を見ることができるようにした。生徒 A のグループでは、映画ハリーポッターに登場する舞台装置などが展示されている「ハリーポッタースタジオ」内の写真を取り上げ、資料 7 の段階では “I’m in Harry Potter Studio. Many people are taking pictures. How interesting!” と英文を作成している。その後、他グループの作品にあった “This place is very famous. It appears in the Conan movies.” という英文を SKYMENU 上で見て、“I’m in Harry Potter Studio.” の後に、“This place appears in the Harry Potter movies.” という英文を付け加えた。(資料 8) 教科書

にも出てくる表現を真似た簡易な表現ではあるものの、仲間の作品から自分たちの作品に生かせる部分に気づき、それを取り入れようとする姿勢は、他のグループの生徒にも多く見られた。

まなびポケットと SKYMENU のいずれも、リアルタイムで仲間の英語表現を見られることで、自分と仲間の表現を比較し、相手に具体的かつ正しく伝える英語表現を考え、自分にはなかった英文を補うことができるという利点があった。しかし一方で、少数ではあるものの、自分で考える前に他者の英文を参考にしようとする生徒も一定数みられた。そのため、単元内のどの段階でこのような活動を取り入れることが、学習者にとって最も効果的であるかについては、今後検討する必要がある。

④ 【手だてⅡ—ii】ペア・グループ活動の充実

本単元は、単元を通してペア・グループ活動を多く設定し、学びが自己完結しない



資料 6 仲間の英文を見ている様子

welcome to our online tour.
I'm at a scramble crossing in Shibuya, Tokyo.
Many people are walking on this intersection.
You can see many buildings.
Next, I'm in Harry Potter Studio.
Many people are taking pictures.
How interesting!

資料 7 生徒 A のグループの発表ノート

Welcome to our online tour.
I'm at a Scramble crossing in Shibuya, Tokyo.
Many people are walking on this intersection.
You can see many buildings.
Next many people are taking pictures.
This place appears in the Harry Potter movies.
How interesting!
I'm in Harry Potter studio.

資料 8 SKYMENU 利用後の生徒 A のグループ原稿メモ

ように留意して実践を行った。前述のとおり、ICT を効果的に活用しながら学習を進めた。タブレット上の情報を個で活用するだけではなく、ICT 活用後もそこからどんな学びや気づきがあったのかをペアで話して共有する時間を設定した。第2時では、チャンネル機能の活用後、生徒Aは「Kota and Aki でもいいけど、**they** に置き換えても言えるよね」「Kota を主語にして **with Aki** にしても同じことが言えるよ」とペアでお互いの画面を見せ合いながら、それぞれの気づきを伝え合った。また、スマートフォンを使用しているイラストを見ながら、「ずっとスマホを見てるって自分は書いたけど **taking a picture** もいいね」「見るなら **watch? look?**」と同じ情景描写でも別の言い方ができることに気づいたり、その場合はどんな動詞が適切なのかを相談し合ったりする様子も見られた。また、毎時間の振り返りでは、ペアでその日に学んだことを活発に話し合って復習したり、グループごとに原稿を作成する場面では、班で意見を出し合い、適切な表現を考えたりする姿があった。教え合ったり、ともに考えたりする中で、表現の幅を広げていくことができた。



資料 9

ペアで学びを共有する様子

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本単元終了後のアンケートでは、「英文を書いたり、話したりするとき、目的や伝える相手意識をもって取り組んでいるか」の問いに対して「できている」「どちらかといえどできている」と答えた生徒は 83.8% で 1 学期末(資料1)と比べると 38.4% 上昇した。単元をつらぬく課題を設定したことで、本単元を学ぶ目的やオンラインツアーの相手となる AET を意識して学習を進めることができたことがこのアンケート結果につながったと考える。また、帯活動の Small Talk で相手の応答をふまえて会話を続ける練習を繰り返したことは、相手の反応に応じて言葉を選ぶ姿勢を育て、単元末に発表相手である AET に対して、どのような内容をどのように表現するかを考える際の土台となったと推察でき、仮説Ⅰの妥当性がわかる。

また、「自分の英語表現をより良い表現にしようと粘り強く考えているか」の問いに対して「できている」「どちらかといえどできている」と答えた生徒は 57.5% で、こちらの項目も 1 学期末より 25.2% 上昇した。ICT の活用やペア・グループ活動の充実により、学びを共有し、仲間のさまざまな表現に触れる機会をもったことで、自らの表現を見直すきっかけを作ったり、新たな表現を知ったりする機会が増えた。これらのことを通じて、より良い表現を模索し、相手に正しく、具体的な情報を伝える表現を考えさせ、表現豊かな英文で伝えようとする力を育てたと推察でき、仮説Ⅱの妥当性がわかる。

(2) 今後の課題

相手意識をもって表現豊かに伝えようとする姿勢は一定の成長が見られ、現在進行形をはじめとする言語の運用能力は本実践を通して、ある程度高まりが見られた。その一方、生徒によって習熟度の差はあり、個別最適な学びを授業内でどのように確保していくのかは、課題である。また、事実や思いを単調に英語で表現するだけでなく、事実の裏にある背景・見えない部分について考えたり、推測したりしながら、何をどう伝えるべきかを吟味するなど、英語学習における深い学びを促すためにはどのような手だてが有効であるかについても、今後検討していく必要がある。